

神戸市震災人材バンクに基づく災害エスノグラフィーの活用法に関する試案

○矢守克也・重川希志依・林 春男

1. 「神戸市震災人材バンク」

本研究は、「神戸市震災人材バンク」に登録した神戸市職員を対象とした聞きとり調査によって得られた災害エスノグラフィーの活用法について検討したものである。「人材バンク」には、災対本部の開設、避難所運営、ライフライン復旧など、さまざまな領域で阪神・淡路大震災時の災害対応を体験した職員が登録されている。

われわれは、「大大特プロジェクト」の一環(「新公共経営の枠組みにもとづく地震災害対応シミュレータによる災害対応能力の向上」(代表者:林春男))として、神戸市危機管理室の協力をえて、登録者に対する聞きとり調査を継続している。2004年1月までに、計9回、35名に対する聞きとり調査が完了し、今後さらに、60人を越える聞きとり調査を行う予定である。

2. ジレンマを伴った意思決定としての災害対応

参与観察、聞きとり調査にもとづくエスノグラフィーの作成は、災害対応研究に限らず、人間・社会研究の基本的戦略の一つである(佐藤,2002)。ただし、問題は、その活用法である。エスノグラフィーは基本的に日常言語記述によって構成される。このため、一般に、そのエッセンスを抽出・表現することは困難であり、それを効果的に伝達するための手段・媒体によって補完されなければ、教育・訓練ツールとしても活用しにくい。

さて、かつて、サイモン(Simon,1989)は、人や社会のふるまいは、意思決定の連鎖と見てよいと論じた。災害対応も例外ではない。いや、むしろ、災害対応など危機的事態に直面した人間・社会のふるまいは、平常時にもまして、明示的な選択肢に対する意識的な選択の側面をより濃厚に呈することになる。実際、われわれは、これまで収集したエスノグラフィーの分析を通じて、災害対応の根幹部分を、ジレンマを伴った意思決定事態の連鎖として表現する可能性を見いだした。現時点で抽出された多くのジレンマ事態の一例をあげると、以下のようなある。

『災害発生当日、市庁舎の前に善意の救援物資

を満載したトラックが続々到着。上司は職員総出で荷下ろしを指示。放置すれば、市は善意を無にしているとの厳しい批判をうけるため。しかし、他方で、各職員にはそれぞれ、電話対応、避難所開設、物資確保など、大量の職務・課題が山積。上司の指示に従うべきか否か?』

3. エスノグラフィーの活用法 - ディベート、ゲーミング、適性テスト -

エスノグラフィーは、いくつかの方法によって、そのエッセンスを抽出・表現し、教育・訓練ツールとして活用することができる。いずれも、自治体関係者のみならず、市民、ボランティアなど、広範な人々を対象として実施可能なものである。

第1は、ディベートである。これは、ジレンマの関係にある複数の行動選択肢について、そのコスト/ベネフィットを意識的に勘案し、かつ、当事者間で、それを共有させる機能をもつ。言わゆる「自助・共助・公助」の配分に関して、具体的な共通認識を醸成することにも資するであろう。

第2は、ゲーミングである。具体的には、吉川ら(2003)と「Discruples」と呼ばれるカードゲームを開発中である。ゲーミングは、複数のプレーヤーが明示的に意思決定を行い、かつ、その結果がプレーヤーの、次時点での意思決定の前提をなすという構造をもつ(Duke,2001)。この点で、ジレンマを伴った意思決定の連鎖としての災害対応を表現するツールとして好適と言えよう。

第3は、適性テストである。これは、複数のジレンマ事態に対する反応を、質問紙形式のテストによって測定し、その結果を心理検査の標準的作成手続きに従って分析するものである。災害対応過程に見られる典型的な事態に対する回答者の反応傾向性を抽出・分類し、ひいては、危機管理に対する適性の診断が期待できる。

なお、上記いずれの方法についても、聞きとり調査の際に収録した映像・音声をビデオクリップ形式で編集し、解説部分で活用することによって、より効果的な教育・訓練ツールの構築を図ることが可能である。